

沖縄島に移入したプレコ類の多様性

高木 亮太郎

沖縄島には、様々な外来魚が移入定着していることが知られている。中でもプレコ類は様々な河川で大繁殖していることが知られている。今回、2023年1月～3月および2023年10月に比謝川および南風原ダムにおいてプレコ類の捕獲をおこない、標準体長、胴回り、腹面の模様を記録しそれぞれの河川における違いを比較した。

腹面の模様は黒斑が独立したもの (A)、黒斑が複数つながった模様 (B)、迷路のような模様 (C)、白斑が目立つもの (D) とパターン分けをおこなった。比謝川ではCの割合が最も高く、南風原ダムでは、Bの割合が最も高かった。Dは比謝川でのみ確認され、Aは南風原ダムでのみ確認された。このことから沖縄島に導入されたプレコ類は県内の他水系においても模様の割合が異なると考えられ、少なくとも比謝川と南風原ダムに導入された個体の原産地は異なる可能性がある。

比謝川で捕獲された計119個体について、標準体長の最小値は247mm、最大値は401mmで最も多くの個体が捕獲されたのは340～350mmの個体であった。南風原ダムで捕獲された計123個体について、標準体長の最小値は212mm、最大値は337mmで最も多くの個体が捕獲されたのは250～270mmの個体であった。胴回りは、計測値を標準体長で割った値で比較をおこなった。これら2地点における胴回り/標準体長と標準体長を散布図に表すと、それぞれ相関がみられた (図1)。両地点ともに成長に伴って胴回りが小さくなるが、同じ体長のプレコであっても、南風原ダムの方が胴回りが小さい傾向にあり、南風原ダムにおけるプレコの体高または体幅が比謝川よりも小さいことが考えられる。このことからダム湖と河川の環境や生息密度の違いによる体型の変異が起きていると考えられる。

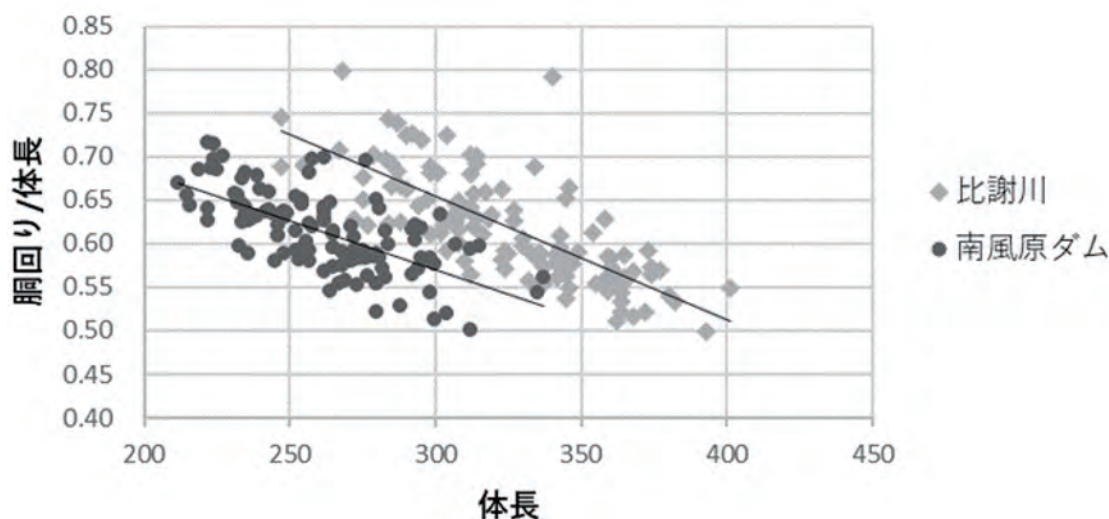


図1. 比謝川と南風原ダムにおけるプレコ類の体型の比較